

## 里川づくりワークショップ

東京都心の生活で、川とのつき合い方を回生する方法を考えていきます。

ワークショップリーダー：難波匡甫さん（法政大学サステナビリティ研究教育機構研究員）

## 府中用水ワークショップ

府中用水に生息するさまざまな生きものについて調べ、学びます。

ワークショップリーダー：齊藤有里加さん（くにたち郷土文化館学芸員）

## 小水力発電ワークショップ

持続可能なエネルギーとして注目が高まる小水力発電について学びます。

ワークショップリーダー：古谷桂信さん（フォト・ジャーナリスト）

## 都市河川・暗渠体験ワークショップ

都市における河川の役割について考えていきます。

ワークショップリーダー：中村晋一郎さん（東京大学「水の知」総括寄付講座 特任助教）

（2011年6月現在の予定です。予告なしに変更する可能性があります）

当センターでは毎年秋に「水の文化交流フォーラム」を開催して参りました。テーマを掲げて登壇者による提言とパネルディスカッションという形式で活発な意見交換を行なってきましたが、今年より新たなスタイルの学びの現場として「里川文化塾」を始めることになりました。

ワークショップリーダーはセンターイチ押し若手専門家。今までは年1回の開催だったフォーラムから実施回数を増やし、より近い距離で参加者と意見交換・情報交換をさせていいただき、一緒に水の文化を考える機会にしたいと考えております。

今年度は、夏から秋にかけて、次のようなプログラムの開催を準備しています。開催地は東京近郊の予定です。詳細は随時、ホームページにてお知らせいたします。ぜひご参加ください。



## 東日本とともに

4月28日から神戸大学の学生たちと大船渡市内に入り、七つある災害対策地区本部の一つ、赤崎地区生形の避難所の雑役を担う作業をしてきました。ここには100名が暮らしていて、北海道から寄贈された自衛隊式風呂が二つあり、飲料水には適さない井戸水を使っています（水道の復旧の見込みは、まだたっていないません）。風呂を沸かすための薪をつくる作業や風呂の掃除が主な仕事でした。また、瓦礫の中から見つかった写真の洗い出しなども引き受けて、10日間を過ごしました。

帰途、「水の文化25号」でお世話になった大船渡市三陸町砂子浜大家の千田基久兵衛さんと石巻の「石巻千石船の会」事務局長本間英一さんの元気なお顔を拝見してきました。本間さんによれば、千石船の模型をつくられた大工棟梁の新沼留之進さんもお元気とのこと。

千田さんは「津波はこの高台にまではこない。火事に気をつける、と時々言われてきたんじゃけど」と言い、母屋と土蔵（写真左上）は床下浸水、背後の御堂も床下まで海水が迫りましたが、御本尊は無事だったそうです。東北学院大学の斎藤善之先生も無事で、資料を心配してすぐに駆けつけてくださったそうです。

本間さんのログハウスは全壊。唯一、土蔵が残りました。日和山の麓にあるテニスコートも数メートル手前まで瓦礫が押し寄せましたが無事。（写真左3枚目、右にテニスコートの照明灯が見える）。最初は避難所に入りましたが、今はテニスコート脇の事務所で暮らしています。土蔵は瓦屋根が津波で壊され、2階の窓から海水が入ってきており、貴重な古文書も泥水を被ってしまった。それら古文書資料は現在、斎藤先生によって大学に移されて修復されています。

今回は仙台に向うことができませんでしたが、「水の文化11号」で取材した仙台市若林地区の「イグネ」、「水環境ネット東北」の高橋万里子さんをはじめとするみなさんを、是非ともお訪ねしなくてはと思っています。

あるおじいさんは「生きていても、死んだとしても迷惑がかかる」と。返す言葉がなく、向き合えることができずじまつた。何か取り繕っているだけで、申し訳なかったと思います。

そのおじいさんとながらためにも、仮設住宅に避難された方々に、集落の暮らしについての聞き取りの必要を感じました。社会、文化人類、教育などいろいろな分野の方々に協力していただき、結婚式のときのしきたりや出産にまつわる話、葬式はどうしていたのか、といった風習、畑、田んぼ、魚、猟祭りは誰がどのように準備をして仕切っていたのか、といった生活技術、村の寄り合いで合意形成はどうしていたのか。歌の録音も必要です。

1933年（昭和8）の津波、チリ地震の津波を軸に防災に関する経験など、残すべきものを受けとめなければなりません。

生きていくための仮設住宅という支援はもちろん必要です。しかし、仮設住宅で暮らす間に、失われてしまいかねない生活技術や文化をデータベースとし、復興の核とする必要があると思います。

被災地は広大ですが、集落一つひとつを大切にしたいと願っています。出会った一人ひとりに、できることかかわり続けたいと思います。

賀川督明



## ■水の文化39号予告

### 特集「小水力 - 2」(仮)

日本の風土に合った小水力発電。住民自らがエネルギーをつくり出すことは可能なのか。再生エネルギー比率を上げるために、小水力発電が果たせる役割を探ります。



## 水の文化 Information

### 『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

### ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

### 水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。

すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

### 編集後記

- ◆ 地図って過去と重ねて見ると、気づきも多くて楽しい。震災以降、「リスク回避(回避)」を目的に地図が注目されているが、この機会に活用範囲が広がったり、独自の「マップ」が誕生すれば、と思います。今、私にとつての地図は、単に目的地に行くためのカーナビだけ。虚しい。(宮)
- ◆ 地図は最近見なくなった。カーナビやWEBに代替されている。一瞬にして使用目的が達成されると引き換えに、空想や想像など脳の活性領域が失われていると思われる。ボケないように今後のことを考えて地図を見ることにしよう。(新)
- ◆ 小さい頃は、いわゆる鉄子。私の頭の中には、時刻表のサイズにデフォルメされた日本地図がインプットされた。いまだに実際の形と想像上の形が一致しないという致命的な情報記憶。しかし、その上に旅行の思い出や、地理や歴史の勉強などどんどん重ねられて私だけのオリジナル地図があるのだ。そう思うとちょっと楽しい。さあ。次はどんな地図を創ろうか。(ゆ)
- ◆ 北海道赤レンガ庁舎に行くと、幕末に活躍した探検家・松浦武四郎がつくった蝦夷地図が展示されている。そこには、無数の沢・谷が丹念に描かれ、そのすべてにアイヌ語の名前が書き込まれていることに驚いた。彼は何を伝えたかったのだろう。地図は思想の表現でもある。(中)
- ◆ 一見無機質に見える地図でも、人が賑わいそうな場所や子ども遊び場などを想像しながら丁寧に読み解くと、生活者の息遣いを感じられるようで面白い。地図は、地域のつながり「結」を「見える化」するツールとして、まだまだ潜在力を秘めていると感じた。(緒)
- ◆ 地図をつくるにあたって、デジタル化によって便利な素材も増えたが、情報源によって基準が異なるのは悩ましく、結局は情報を理解して表現するためには時間がかかる。つくる側は使う側の便利に貢献するために、ゼンリンさんの人海戦術のように、こつこつと時間をかけてもらいたいものだ。(力)
- ◆ 連れ合いから初めて目的地への地図を渡されたとき、目が点になった。目印ではなく、道路の斜度やカーブが描き込まれていたからだ。空間認知に個人差があることを知った、初めての経験でもあった。彼の独自の空間認知力は、きっと立体模型で育まれたに違いない。銀婚式を越え、だいたい慣れたけど…。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第 38 号

ホームページアドレス  
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複製

発行日 2011年(平成23)7月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授  
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会  
島谷幸宏 九州大学工学研究院教授  
陣内秀信 法政大学教授  
鳥越皓之 早稲田大学教授

客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 緒方大輔 原田朱野

編集製作 賀川一枝 編集長 中野公力 賀川智明 意匠

発行 ミツカン水の文化センター  
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中塾ビル9F  
株式会社ミツカングループ本社  
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局  
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F  
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506